秋乃記

宗祇奥義抄

全

伊地知文庫
文庫20
189

文庫20
189

伊地知氏書冊

宗祇老人ハ年比尋ね
世中のいとなみなく人の更に
なれい雨夜ハ常に燈乃もとに
て書しるし祇公へ捧らるゝ祇公
ハ又一応ハ捧らるゝ事、
とも代書加へ給ひし道の師匠老人の

ねはたの世外なりて出ちえ
云あり連歌乃興義是一ツ也
過ぬる頃年の永正十六年の
卯さ月のみの十日ゟ長ゟ記ス

宗長判

連歌雨夜記

伊地知氏蔵書冊

一前句付句引合すれハ引放ハ別なるもあり

ゆふ

柳の香の霧ゆる月ハ袖ゟ入て

右前句ゟ引合ハ新しき一句ハ柳の見ハ霧

ゆる月を袖ゟやうしてゆるゝもあり

月ハ内ハ入ゟ袖ゟ

[illegible]
引合て月[illegible]
夜[illegible]
袖をふれる也

行へさかいやうつる華

雲[illegible]尾上[illegible]を踏ふて

引合ていこる山の[illegible]を踏分てハへてゆんいや

[illegible]

おなじ[illegible]

沖[illegible]小鴨に[illegible]

引合ハ沖の小鴨にあまれ家ありてその家

より出る舟[illegible]家いなくしてこ[illegible]

[illegible]舟[illegible]と付る也一句ハ小鴨[illegible]

[illegible]

吹[illegible]張[illegible]帰[illegible]

あ[illegible]神[illegible]

引合てい神前れる葉蔵て神のちるれ
ものうしと彩いりるんちりちるんあり
一百い神の歌をあつてたりまれはと
ごちりい戸帳あり
一前白い人れるなるを禽獣草木れり合
ちるるせるりあり
ちるれりしや古今秋
歌よ凡い洲より歌り海ん

ちるれりまい海いりれ中
お俺ぬちる木あまるり夜ちる
りをのおいらに帰るおく山
廉てなく素とふ舟色や明ぬん
さきれをや人よりんを法をつん
なりんやとの忘れ松幾
きりほりいくらる幾
富のなくもものとは海して

一禽獸をんなのうへにあらわるゝ
きゝぬるたなびく雲の名れ
ケこそうをあしもたゝまゝにあて
男鹿のしゝ乃しきたる山路
あしの葉をきき初よゆゝ金て
雲いかりのいたゝねもゝ
きるゝ夕あ恋懸い杉林
一夜小筋葉の文字まて付しる白

書するゝ小鮒解ゝ
雪踏し小谷の小河春さゝて
名残ある丁を越る山越て
時ゝ花を見ワの山の
まれいひもわ秋のうゝ
今宵月誰の為ゝ拵よ別ねゝん
ゝゝい切りひそ物語ゝ
空てのゝ人いゝうし法ゝかし

人いむ[illegible]法云の[illegible]もし
[illegible]て色いかゝ[illegible]
雲いかりひいろ[illegible]
[illegible]
あゝ[illegible]
明ぬよ法雲[illegible]
雲ゆく[illegible]月ハ出[illegible]
秋文[illegible]人の[illegible]

一前[illegible]の字よ付[illegible]
[illegible]や[illegible]遠[illegible]
海士小舟[illegible]
[illegible]
[illegible]秋[illegible]山乃夕日新
一付白の文字[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]て何色とも捨小舟
木の葉かうく山河の末
男鹿なく嶺の[illegible]よ秋更て
[illegible]
雉子鳴萩焼原[illegible]
一村雨過ぎて合て分[illegible]
[illegible]の[illegible]
太山路い去[illegible]

[illegible]こゝ[illegible]
梅の香をきとり失ぬと
のこりてそ咲[illegible]の花
梅[illegible]有明の月
植てそ行[illegible]
[illegible]小田の[illegible]
曉まてしし入あひの[illegible]
郭公行末いつすれぬ日入そ

一前方に他人ゝ有るを我身ゝ人ゝ
ゝりかせらるあり

折りすゝ人を行来さびしき
ゝゝゝゝ川霧月に弱ゝて
いまくゝゝ人をんをびゝ
山里のむよたゝすむ夕まれ

一ゝゝくゝゝ分かゝ吉夏を分ゝゝゝ
張はいいゝくゝ入あひの鐘

海龍山雲方にむさく陰ゝて
いつゝ行てゝ松さゝゝゝし
二ゝよりゝゝうれて秋の暮
ゝ川ゝ夏とゝゝ月ゝ清ゝ
霧の秋霧ゝゝ晴ゝ世よ

一山数ゝゝ色と分水色ゝ山数ゝ色ゝ分て気
乱をゝゝゝゝゝゝゝ

柳 桂川 遠ゝ河ゝ

山里まさし入浅き門かりて
蘭さう藤波里い茂りて
小舟すて亜江こそ富れ
一前句れ赤の文字を外句紫句
さうさう
荒がきに波代さつ波去小舟
物敷の川そ岩はしれ拾く
人よさてゆ母よさふし津津浪

立田波山れ　秋のいろく
一付句の中の七文字を臂（ヒヂ）とし二句
うこと雅俗の夕くれの空
郭公戸れ出れよ明拾て
うたう野鄙と庭て波行
あれ中きい尾ゆ尾むうれ里ゆて
一詩れ對句れくよ付句
越れ家い八重の高雲

沖津浪月れ子置よ毎ゝて
さよのゝるそあとくぬ川
白妙の雲の沼山よ蟬鳴て
山陰の月や蛍（ウケキ）の部（フシ）所
秋れ入日よりゝ人なくゝ
一前白よい（宿）ゝ宿（タンテキ）的の夏を射ゝ的
さひしちつゝさ誰に加ゝて
花ゝゝ沖も白を須ゝて

我ゝ誰よりゝ秋の空
萩よ夕れ雲ゝり丁ゝ孫
志のゝんゝてやけしの空
小萩ゝ萩よれ炊ゝ多まれ
一ゝゝゝ志ゝ志ゝ人ゝゝ川ゝを射ゝゝ
ゝれきゝを見ゝもゝき
ゝゝよゝゝゝゝゝあれて
ゝゝきゝゝゝを井ゝ夕れ

雲八よいひやはんとうわ待後て

一前句よいこる而のさ毛をきてそるる

田舎とし〳〵い物そり舟き

家もしなれの竹一ちらよも咲て

誰かいをいけんうしな愛山後

ひの〳〵八柳ま木く梅咲て

一前句よあらまさふさもをいるを引て

ゐくらすもとをけそるる

志のふもやふうつる八ま〳〵

化人と来てもてせたも嘆

二子ひい人とおしこ思寄よ

多月よりてたしそき最

一おゐよこりやとそゐ紙不審なるもを

ぬきふるる

あまりうき世を人よこりや

別てふもを誰男よそしたん

世乃ちゆを松よりうやゆ
むを凡いりよりちしゆつる
ごりや神れそのうこの名
玄をかと志ゑの月よりへうん
一ちうれ誰よりこうんとゆふをんふきあい
かいなり咲付らう
誰より春れ形ゑ八まし
つれしい霞しうり乃れほき

秋よりうとゆれなこいはし
月をくゆ住人れや苔の庵
一村白のまよふをへうんうう
んれすへよりの雲タくれ
待もきし恨もせしと云捨て
のこるや木の葉山風の声
ゆりふへきあつれいもよとつきて
一ん傾きうりうよ系乳を付うう

寵のむしろいかもあらいあれ
月のころ特場ものるの船ばけ
うき身思へいあちきかの世や
遠山れ雪のゆへ〳〵う消れて

一前句は系乳二句続きしるべ　財(ざい)
落葉ようこ虫の相染
秋のあはれを行ゆくへ
俳諧(はいかい)雅(がか)は　八穀(はちこく)

あまもかとうはいのふうこ華
一系乳は系乳をもつる白あわ
おと山の落ようる川　吉
枯れ葉よりれる月は遊(ゆう)して
雑(ぞう)の林の里は来うれて
小紅すて垂　江こそれれ
寒しろき節れ去る白の花
枯うすむ山や遠く垂はゆて

引ひくれもの　横雲たなびく

雲ぬ夜の月よ一筋ひきて

旁に物ものゝ　志賀ぬ辛崎

秋の夜のかすみぬ山ハ遠ノ方て

月もなれかしの　海旁のえり　雲のえ

秋ハ今ハ廣野の末ハ富士ノ根

遠山の端ノ方　秋のさハ　さ

天津ノ沖ハ　ハの法を引て

志なれの路ぬ　雲を分て

出の明ぬ　色の遠山を分て

一人流ぬ　乳のなる

山や海ぬんを　かきわるふむ

郭公　雲ぬ月よ待ぬて

雲よ雲の　月ぬ　遠山

志なぬ波の　ぬ　ぬ　波の

公原ぬ　ち乃　衣の　ぬ

雪をきものの見ハよ月更て

一刹の余気

すく吹風ハ春きいりぬて

よし野山もものの春寒(サヘ)て

一前白何を分ても分へしと咲るゆ

あるまつ白に春ゆ雪ゆ雪ゆ

今れ咲き去ハ来ゆ

あしひよ咲ゆ新花香ゆ梅さいて

ゆ春ゆ残るそぬの月

春の夜の柳ゆ小紅梅更て

遠てゆ月ゆ霞むすゆ春ゆ

色つきそめゆ常の別(キヌ)衣ゆ

一おゆ白秀白ゆて空にくきを安くゆ

ゆて付ゆる白

我袖のはゆ月さ花ゆて白

為ゆ白ゆ花ゆの色

一遍とゝ[illegible]羽を[illegible]ゝを分へゝ[illegible]

あゝハ中くゝとの無も色

よゝあれとゝわゝゝねまの無

あゝん限をこゝをよこそもゝて

新うすき汀ゝれ月の神秋ふ

あゝハまるゝあゝゝひの粉塗て

山路やすゝゝふゆゝゝちゝ雲

一おゝ白ゝ行る羽の月をすて分秋あゝ

[illegible]ちゝゝ石塗ハ行る山里ふ

独ゝゝれ切ゝゝゝゝゝゝ

[illegible]ゝも石葉ゝも不分但ゝゝゝゝて分ゝ

庭ゝ入ゝゝ川ゝゝ木枯の月

[illegible]ゝ日ハ[illegible]ゝのふゝも人[illegible]

[illegible]ゝのふゝゝ屋ゝ入ゝ川ゝ分ゝゝゝ木枯不

分ゝゝ日ふてゝゝゝゝゝ

深水のゝハ去ゝ埋れて

原田を植る殘り殘りあるれこ

田をうつる殘り殘りあるとなりてわけ

をすてるへ但田の辺よりかすかなる〳〵きりの

霧分たく〳〵のぼる日の影

山ちかくむの木末のあらはれて

高山のむよ分のぼるゆふ日影不審

但むさく〳〵山のあなたよりきりの

あとよりはきりる山の峯雲

行人の袖白妙うり雪ふりて

行人のあしの跡あらわ雪ふるとなく〳〵雲

不分但雪の山よ雲なり〳〵雲

高砂の霧をたち〳〵秋月

月ゑと寺夜半の遠寺ふ鐘

厚よ霧をたち〳〵ゆ秋月をすてる〳〵

但秋月のあ雲あわ

かすれ住わる山れたち〳〵雲

[illegible]を筑るかを氷る日ま
氷のきるさまあるのうれて信濃信濃
富の山不対但富乃山ゑ
一切りゝ[illegible]のゑ字に対ゑ
切りゝハとりぬるもうゑ
どうそねし一疫を今ハ命まで
四ゝハ今まる仏るハあゝ
絶対ゑ[illegible]ゑ[illegible]中絶

切りゝハ富ハ[illegible]ゑ消ゑ
きの富ゑ富士のねいゑ
切りゝハとゑとの字せいゑ切りいゑて
ゝきとゑゑ
一ゑ白のんとあゑねゑ[illegible]ゑ白
をゑあゑまゑとゑをゑゑ
老のちはゝんゑも安ゑゑ
前白ハ富山ゑ四節ゑゑ対所ハ[illegible]

[illegible]

いにの時のハまよ[illegible]れる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あるハ都よりすくれるむいあらしとゝあり
けんハ清くゝあらんゝつゝ三とゝ
いつれの宮ゝ位よりゝ
たつ秋しよせのかいあきを
前白ハたつゝゝらんゝけんハたつゝゝしゝ
今一しゝをゝ
孫さゝ未聖ハ歳のあ月墨
前白ハ一しゝ忘帰ゝるよゝをゝらんゝあり

けんハ裏ゝんゝわ山桜の秋雲よゝけゝりと
お盛秋乃あれも仏ゝて
れのゝ松れ雪ゝる陰ゝ
前白ハ去秋のあゝそひゝけんハ拍晴
松の雪の夕れ去秋のゝ衣ある猫ゝる
一こゝとゝいゝ白よけゝ二桂あゝさゝあて
けゝる白
人こゝそ人をいゝんゝけ

雲水とあつめぬ窓を照すらん
梅しるしまことなるあらいせ
雪のこゑ谷の鶯さえて
秋しるしいとかりしとかれ
誰もとめんうるまのそ
佛法僧とうるもこそ家
人いかと初を化よりすん
寒しそのこれ秋ぬ花

山遠く月は入堅れなすまま
とまわしてこそ船のよるあ
松をる主を山りとのゆかれ
ひしとの人のうるもろぶきは
むしそのも移志賀の古
せりて契つ言かたりを
思出てこうんるかをかう発
一さうあね分つあわ為よ志ふこそと云

七

涼しさを見てねぶたき行らん
ちるくとほ(ナギ)しる秋の夕霧
ほとゝぎの月や西よりそ出る
秋ふかき雨の羽の猶小倉山
さてさていとゝ思ひわびれ
きき人の居(ヰ)にのこる山櫻
一そとは云ふよ付松二見うらをあごとて付うら
ふとゝぎすねたる人俗なる

ゆくゝの角しき代は生れ来て
探そ問ねね峯れきゝをを
吉柳のうつゝきちるくを吸寄
さまりそ地ゆきあふさ丸嶽
人ゆる山さゝゝゝ戸の雲る寂よ
あふさゝ居山さゝゝ戸の実寺い
人やうとあゝねをやゝゝん
人のあきそ寺をを行ノ

法の場人の形くたよりて
一又そなて外ることあり
ちくくりつこの世の中にてうき
掘地内をいとくあり(アリイ)て
ひしをきのの袖を霧きき
置いあれてなものを独自の節よ
僧士の衣をそ又ひもの解き
きあれる使(クヤモト)い家を行ぬて

とかくなしこの情ありて
人を治富よ地ぬまこれて
一りあきんの秋ちくあり思案分
ろきをもいよ又高ぬ世ぬもを云
きるいくせりそ家をとれ
てれるさいい月に沒るもあ遊
よりやきはしいい思ひあるさわ
月よ見ろうきせあわきあせん

はるかなるこしんのまくれ
人よりあまたあるもかなん
人よせあつて一さとあれ
つれなくて淋しかるべかりけん
為よりきんなりひかるもん
とけ君を人のこをとふよ
力不及何とせんとすらんあり
泡てやいかりはあるもかなん

ムクラ
蓬の宿の秋のタくれ
義孝さんて物りは知るなる
無路よりもあきをいかるもん
ひとりまてもあ人をは
人をまち秋の秋をいそせん
いるあしてもよりてらんと思ひ知てうち
かるまらんと
いかるもんをいそけん峯の雲

なをいとまは雪まよふ又雪をまつ人
なほうかるいとせんと我ゐ笥ふ反
ゐをとゝり
一物をとゝ紛よ二つ人ゐ遊て往ゐる日
うき世乃中よりもあくがれ
なほ思ひ老せぬ人も多き物を
とゝろん神よまうせむ
云の葉を人よをすもう寺物を

おるよあるもはし哀こ
ゝんきこゝ妙きをぬれ新
鮫ほの心も志ゐ人ゐる為を
陸奥い信寺國とゆ物を
あこやれ松よさゝ月新
見ゝさる為い我さ人ぬ物を
行を海ゝゐ人ゐ寺名ゐゝん
人きゐうひて往ゐる日

あのまへよろこぶするのハあきぬる
春秋ほうすを後つま山
ひとしよりかゆるたかしもあきぬを
老ぬとをうらんなのあれさ
をて後出へき月もあるを
かねれうらけの秋のあつま
さをのりれあつき夜る月うけれ
うゑて伝らんこよりかの嶽

一前白きとりをとあるる白まハ外うを
うきうとうハいををを

武蔵野よりの秋の景色をうらん

かやう未葉乃ちるの七月
為春ふ世なとふるん
獣のまれ秋乃夕れ
毎りねを思ひ我為つ秋
入山毎れ 華一の春八

指すも根ふもかつて花咲て
ちりれいつくよ去いならん
去秋のうさを思ひ出る
ちりそわす寝を我ひとりして
ひくらも文よりつくは
一ふの寝ふ所て捨ひ
一あまりよきうをいつ海ふく分て
山郭をとてゆくう

いのどうやもの暖少月夜
去秋の夜いつれくうねて
ふ鶏なくあ月海き新
一おのを分て別を分ふする
為をくるも神の懸く
極し田の稲光して降毎よ
人の為を田のうよふし神を雷り
付ふしうり

雲ゐのうへとよりつる浦風
雲白山は雅のうへ山は秋文て
うゝ風を雅の葉のうへよりなびかしこまる
秋の末うゝ末のよりをさりて
幽なる境を横川のさゝ
移ゝ秋さし捨かゝ隠あつさ
横川の寺の境を秋の川よりうるはし
月はかき初の伝ふるゝき

山かきのもいつくへもおてゝむ
月を山吹のゝのかきはらはかしてく
鳴門(ナルト)の渡越川のゝそさ
春末の公も伝ふきはうわ秋れて
名所は鳴門をアのかるゝ乳ぬく
鳴門よりさし出されし月あるゝ
りれそよるゝのかきん地せて
一文字を分白ゝて見るゝ白

忘れ草生ふのゆかの月の秋
ゆふ色のくるるよむらの遠山
紅葉ちるやはつ霜月もいま菊
こがく恋をおろう神こゝの色
あさひし霜の松風流の色
ちらちらうるよ木の葉ちる
あゝ女の素ゝ少られ乃元
山里いもの白しょうるの色

一ちらさきぬよ大ゐるぬをかるる白
をいきこ被をとゝ波濤のさ
大海の遠き塩干よあきりて
ちやきりくに袖あのむ色
霧の言葉おのあしに野に枯て
霧の情をふくさちゝある
波よわも人を恨ふき世よ
ふるさとやしの一年の跡

行めぐる松ぞ後もとて
一大きなる和よちいさき和を付くる句
おり出てうたれい四方を遍き
礼拝まる衆る方の花ハ廣し
雲ちらの月の絵すく雲
奥山の岩のと絶よる雲て
うたてしかり 古々の山
笠まふき御ハ誰ぞあらん

雲ちらさんひそ狂ふ哀れる
箕の間を抜む舎とるのねて
一大事難句より付つあり
佛法僧とうもしてあき
人のをと羽を化よりぶん
物ているの声もてあれ
光雲りてい河を渡る華
初秋よりすいよきの神垣

迷ひてや我世とあくいのるらん
踏(カモメ)よ　ゆく〳〵る人を呼ぶき
ゆ(ゆけ)れ　ゆき迷ひ波のさいきの世をて
あよ出ねそ　新玉なる
あわ〳〵と　ゆきもよ　ゆきもれん
車の右よのなし　ゆるさ
人のなる馬場のひ　ゆり時こて
一うきよつ〳〵きうつ　きはし　あれ

一白のうちよ　ひていんがうりうし
見も　秋月の　ゆれ
よう〳〵ぬ人　ゆ　ゆ　ゆ
恨　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うき時　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
お　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
言　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
何よ　秋の　ゆ　ゆ　ゆ

世のうきよかへたくさんふきぬと
思ひうくとてそまもしらぬ
人よりこしらさるる何ぞ
実もひとりと世の中
誰の上ぞ月のうきなをつかん
世合等なりあとうきといふ　秋之
一ぢうきうれしきハ一ハ泡きんさ
ひけ世合葉

今青疫のハあり仏をの家
絶れくうろ解き出て見よ
日も夕ハ花ハ別くよかり夜
雨も夜ハ花ハ別くよかり夜
梅くのふ乃松をひさしき
秋九よりんぬくも立ける
うろ月ぬてうろ月ぬてうろ月ぬて
れろうぬてうろ月ぬて秋の浦

はれハ雲や立わたるらん
ゆゑ有し方を浦なれぬるこそ
あやめもふかぬ袖の名くれ
月待と人をあるもあやにくよ
うたてといふもはゆのうち
加出て貴賤袖ぬのうりの山
一うきを尓於葉
浦雲よこゆるゝ時あるれ

あゝ杉ん山のうち独ゆる山
たるうるる遠干の浦ゆ夕波よ
多くや知ぬ小我胸(ハ子)のうち
かうもれハ名れ出れ袋の松
待人ゆるよ月出るそら
まつ行て人の寝ハよりもあと
あとしたもよ誰を待ら哉
待るへきこゝろ色美況

うゆの山へよむ人富士の根
一ぶと云約二町をくんもきる
ぶあわすしの紙わくくわ
人の世ハ読んのうちはかちまて
くれく時のまにうる海苔
塩ひそハ汀の松を沖よみて
ぶ一筋ハ思ひあわくわ
なよ恨ミ本の葉よ人を待宿て

ゆく秋ハ都ハ人ゆく秋ハ凡
下葉黄ぬ物の月よ出ぬて
一又さ枕くくとくんよ行くるる
寂(サビ)しき空(ソラ)ハ人ゆく壁への去
の蓬ゆく庭の芝生よ星古て
わの山ゆくくゆく月ハ人くわ
人生ゆ尾上の宮の五葉松て
くるさハ兵部稲妻の新よ似て

横雲出るころ明れば月
袖のうへにそ秋の風
夕日さす時しかぬ沢の若葉
かくてふ秋を見るしるしなる
開の行よ松は葉ハ枯て
一夜といふまあるのんるる月とあられ
いくらいふ恋するもし親を慎とふ
孝行よするもあるとほもるんもあり

寝とうるんもあり
のちりてそ袁ハ切る春のな
枯るある夜れるる明乃月
憚むいうあるる人を張の宿
うきかりつのあつきのあ
枯そくあの名結なよ色
村雲ニ月出袁のそひやせん
さしてきもまるもんよ菊の屋

袁ともきけあるうきのあ
ゆゆしのあとあれくるわ
為ゆえしむとんよやとれ秋の色
いつれもはりしろきんあり

一初より分る白

住吉八景は里れ名のうて
長井の浦よりうよ月
まれもいろをとるあれ祇園

秋ものゆゆしく分るれ声ひく
あくとうの竹よりうう葉
義経は遠山嶋れ里よりて
神垣のわのうるあれさ
里くれ鶏きて更ふ寄る
一おのよりおゆ夢れ初地ほく出るうは
分白いかのうよ其初をあうひて
宮打てうひ高く神うの

はるばるやまを越えもとあるさん
ぬしとなんなる神らちらこふうきもの
さのくりてわれ宮の拾ふこれ
一前白よおやまの紙(オシカ)ハあるこハ分白よ
その歌とさゝゆるるこよ分るこ
いとく泳ぎたこしたるこ
久波よやく宮こは火我宮
来ぬ人をまつの宮のゆふ分まよ

焼やこはの方もこうれつ
あるぬ人と思てゐるもの
こ書を川ゐ生のゐれ
出形する形場の船へのゐ生れ
ゐれこ海こして思て場れる
ゐこうゐ思ふまりやいある
出こ宮ゐ思ゐる園の陰こて
歌もしくこゐ思ふ出ゐ

行くのひまうこ（雅）面うわう
ふうこと さそふあつまの遠
老よそや男とう寺芽の根をそ称
俺ぬれば男と浮草の根と絶て
さそふうあしうはいあんとそ思ふ
一人のあまねく知る方と刻をかたへ
秋風よ浦潟出る舟人て
れのうるうぬ

ほのくとあしの浦の朋者二
浦うれゆく舟とそ思ふ
あはのうしきもちきよう
雅澤の昔ゆる君ら代よ
ふはよろやけむ冬こう
今とうるくとさくやこのうれ
かつるさは時ある波うきられて
又逢ひ人葉も見わかの雲

神世月ふるく降すゝ立ぬ
きくれそをのそらあくりの
雲よきくゝ成く秋の物ハ
さくらゐの色こそ人をねを貴須
秋来ぬとやよいさやうよそねとも
八の雲よそ地ちうれねる
くゝきは藤の葉分うゝ
ほうゝそ雲ちく秋も分ん

ほうゝそ云て宮津の山とせ葉宜ゝ
鶴さへとこと学つるね声
鈴ゝのうこうよりや遠うむ
ちうゐのうこうまても行のの
秋の浜えのムなりうり
色ハ若も世よかれゐく隆まり
ひしかゝれや海と云ん葉
さ浪や志賀ん邪ハあれゐ

むしろかうの山さくられ
拙方よりと入れも忠度の公
たよりを待りて神奉る里
契りせし数あらはさん花も迄
まこはくまの参らくせるゆ
けれふき人の縁の数人年
はくまとせぬ所まろしきそ
夏はり侍ハくあく清の声

ほとゝきすの松を歌
郭公ゆかる方を深むれも
あるを明は月そのれる
独我あすむ方へ梅咲て
人の来るを待う雲もゆく
梅のむ月よりそ来れ雲れ
ひとくとしもをる
思ひうるを雲もをり

乙ねんを兵吹ハよ悪神て
世の中ハかくしてをれ吹ハが
めよらぬ人も立てらるる
一ぢ寄のん剣して余の和を生てる
袖千歳来ぬ鶴も長生
よそ和のく中人ハ物を学ぶ也
寄ものくみをしを学こし三石野ハ
鶴いらかてして袖よ高名れ

こ所ハ名ハ松ハ名
ハ系の一村すき植る野よ
ゑ亀をこるるハるよりけて
あ行ハ行をむの結よせん
一前白よ寄の紅ふ出を生白千
長紅を出白
ちき出ハそ病も永
うすくこき紅白の全わの色の葉よ

うすくこき樹人のうつりの花葉に
あらはれてうん移りの色のしるきを
山奇と楽して病と知らるとも
一東奇のん親ととりて生きらる白
木の葉法にて色なりて
さのくふと流の神よ問ふるん
ゆよしられぬ思ふ神のかりやは
木の葉のちりよ何を保ま

拾ひ世とをすれ果てり
もろもろ山の庵よ住ひく
さまのゝ白うんもいさもあるはあれ
ふりもてゆくりふるうるの月や
忘れんとすれば人の面影
逢はまもうつる世をとゞまれて
うしろあるそのゝそらつれ
といはゝ思ひ油うれ

大空の雲も月にはれぬれば
月をもかくしもてしるさとうと
はるゝハ月をもかくしもてし見そあれ
つれなく人の老とゝ
思ひそあまるゝ秋之月
ゝゝゝよいしらわ月をこそ
今ゝゝとてしらわよ出月て
ゝゝの月をまち出るれ

一其一哥の却りけいて仕まつる
ちきしし却よ哥をそ
俳ゝゝ世よ誰を恋しん
ゝゝん事をゝりゝ
何ゝわのゝ世をゝるも懐すて
俳ゝなゝきゝゝ
人のゝゝ無特しゝゝ
おゝゝしゝゝ

あしたよりもの思ふ人々多き言
葉よりも哀限の誰ゆれま
むの花とふ春の山風
いつくに秋もゆれぬ中そ
夏の秋い寄れとを言ふすて
世宗千波多くに秋むし
風とる秋の草木の露をうて
秋風は吹方千吹まる春日山

何陽草木のうつりきるへき
ふりゆくとそわく方も寄
と知いまる去ひとのそ世て
三春月とうそうみうの
ゆもふふそ今さいふ雨う春
春とい人のわまねも色
ひそうき伊のくよ変ねん
山法ようすまねんのりゆ月れや

おしまれて八月もすぐる世ふ
さし花をすてもらひてもらん
ほしといはれ〳〵と雑を物し
給ふ事ハ知らず今さらに
雑のまことをうれ我ハ物まを
めよ引る雲ふかく〳〵たのふ
富士よ晴しろ雲さるもん
わの世をいくよあらひの
あたと待ひの

かうの鶴といふれるもん
一初いろをひ殘さと白
さひしさいく〳〵言のこう秋の山
こう吹て よ萩ハ葉の露
淋しさいゆかれのこうまこ花も
立ぬ凡も萩のあ物もとひ
ゆかりて物を思ひ離ほ
春をとさはまこう秋の凡

雲の無ごとをいひ又秋の月もくもり
ゆしき如とゝく
山よすむ月のいりをゐる
おのゝ尾れる世いろとゝの我よひ
浦ゝる世いろとゝても我老ぬれいろひかゝ
やしかわ
翁
夜いるよ山の井かゝぬるも
むすふの水に濁る山の井の

あゝても人よろこれぬるれ
故ふ水毎よあるねんく
佐ひも紫のよ紅い佐一し
むまに紫の限いうきゝわて
あまたさまも細よ書佐まもくゝく
いひきゝをても狂我人のこあゝう
うきゝく
一なに奇のんを加ゝ高仕紙あり

深かる谷にも松は風吹て
よのうきよりは山の淋しさ
山里は物のさびしきことはあれど
世のうきよりは住よかりけり
木の葉のちりの陰をそふれる
みしそと思ひし月よさよ河毎
枯はるを木の葉かくれもなかりき
みしそも月はみえわかれ

いのちあるしにあへる御影路
君の代はたえしき風も治りて
うかれ人を御影の山下風
たえしれとはいのちねあかぬ
折りふしに思ひのたかわもそなき
ありあまると限つまと雑の云すはん
秋風は初来も来て風景も新し
あしたとおもかと思ふとかわそ

一ぬ中奇にうち海ゆ綾こうる
雀とうしみんとうわもかし
世の中ハ蘭よすむ虫の涙そ
侍士の刈蘭よすむ虫の我うと
ねとしてかうわ世をハうこうこし
一日ハ我うれかうこうとうんて
秋ハうとうこ夜深忠寺ハ
物寂ハ姨捨山ハ月ぬれや

ゑんなくさあうゆ川さしかや
おこ捨山よてる月をこんて
一日ハあくさあうねうるんて
一もとふを示紅葉よ分ぬうる
あれもやりあれ鴉ゆく
ハさいくタ山りとれ一松
旅ゆも秋のけうさこと之
苔枕露も秋のこうかうのたびそ

もゝさくらを見せぬ新貞
月遠く出れいづる新雲より
一番白よ分るき物を二ついろる
別の色をとるわ出しるる白
素林の袁川出とる分て
ゑ鶯ゆく歩れ月細き新
待もとれもうさいらし
ゆゝ行んはたらてのまのるそて

夢露のこゝろ化のことわ
ゆゝる世を思へいるの泡よ似て
一ん〻のきものよんを付る白
独雲をくもの中山陰
ゑれゞのゆものゝをれもるよ
ゆよゆゝたい未ゞ迷へん
山吹をとるへよ咲る春もし
あゝ〻桜を一るよちる

今日のこと却もそむもゐをて
はりすちとくまちる長さ
月新よむの宿うちなの長
んもきくに山代を吹
文字原月い雲ともれむん
うきとさしそとくちわを先
松はんうるやむよおるるん
長尺山路のはくをとるん

きをもむを人いゐをし
一重紅よりさ紅を分るる
梅とも思ふねを推ふんん
人まもの人のきを学ぶ
ふくをかくりてそきく
あれ飛者の人を逐俺て
一紅よさり会てんさう分るる
於し先ん人をく月の入山

枕にうつもれるむかしを枕にて
夢もおさめてかうしんの
ゆもかきさめのふのもの山風
わひねする身にも年八載を
玉とそんく春の物のうるはし
あらとそんてねをもとうし
高砂よりの雲より雲ノ数清て
ねうしく悪僧あはさうちくハ

吳竹はしをしをうしをうもれ
雪中乃筆の故事
一ち場とゝ云句述懐のうちよりかきうし
何のゆすてもなるし
すゝもとそうねあうまうの山
もよ来てゐるとうとうちるん
ち場の流ノ月をうて
焚ぬうち枕にて枕

高場の山にて高砂哉
雲うむらもあらぬ寺ねん
人の志しのを高場の末
とゝ松や空よりちゆ月の哉

一ゆき　とゝの紅のゆ
ゆ法ゝよりていまゝるあゆよ
ゆまゝほしさよいさかれ法く
ゆすれていらち紅うゝ夕へ哉

ゆれのゝ志りてゐる月ゆを
あまれゝゝ藻ゆゝ哉ゝ
夕波よりゝていゝ燃てゝ海寅
いくゝゝかゝん月ゝゝ雲
秋ゝゝ河ゝていゝ文ゝゝ
一ゝの思ひゝゝゝ果よ
と絶ていまゝゝ山ゝ
一ゝゝきゝと云ゝ変いゝゝゝゝゝ

次二人仕舞のあり月はあくるまる
うくく月いるるもうしき
雲とうるおしいもとしてかをすること
親をとるおしいをとこいるること
みとるおしいをとこいるること
うるれしきとしてかさしきこと
又世のしるきくるあり
一まうとこと云字よ分秘あり

みちよ人の後いあるられて
きりほとるおきゆへすもおせ
まるほとるまはつまをおもと
雲のまるるをもるれ山里ア
まるをしるへき世をも思ひ
今一月世をあはぬ生よりまる庭
みうきるよ神ホきるめん
思ひきる男を一産(ライ)よ捨もせて

みつるをいかるがわ
舟のわたり宮の名代一人の夢
又ともすれば袖をかしき
流れ寄藻花のもとを独りて
まろ立つるかもとけれども我
薫を同じ所のなれて
一夜の名ゆるよ名をかけ
をられて恋ひ来れば

村雨すぎやせぬ袖
春のうらゝかなる奥山
寄せし雲たちの光
うらゝくれ花のもと
散りぬ境のおよこ人
その宮そとうらゝ
秋末月鶯のきねは続て
見人別ぬるのうらゝ

元宝と雪と翅を翅を夕ぐれに
とられきゝもとゝ[illegible]
初しもは夏すゝも人を待ぬて
雪の夏さく[illegible]
あつきを焼よ年や越ぬん
ゆふゝもて毎ふく夏
九くの月よ弾(ツルナキ)郭公
[illegible]

山ゆゝ[illegible]
一ゝもよ華の名を[illegible]
花よゝ[illegible]
物の番の名[illegible]月春
[illegible]
徒[illegible]
[illegible]
梅[illegible]

すゝしたまの梅ゝ香をする
むよのくれと赤の色のふるゝん
音なわれいたむものゝとゝに
ゆるみして凡ようくさむ山桜
むしそりとれをいつてゝね
山桜枝末の花ゆまさまて
一枝のうはよりてねひらるもわわ
又大枝ひ又小枝ひたいてくゝ又一方まて

形もあわ小形ひとあわ小形ひと
いふる
ムラムラそゝたつ秋もとゝや
咲むを末のゝやを位のたりすて
まゝよ山乃まゝすわる世もか
山里のまゝひんもゝ訓ねむまきて
玉蜀の白くあるとこゝくゝて
ひんゝゝたゝるゝ春のひすゝ

動かはし世ふかき川とまわりて
春のあけぼのの雲とくるまれ
へにの新とらく称ふかたくや
出うその春の夜の船戸打あけて
はるくとも晴ぬ雲はつつ
新勝寺をとを右よりんをりや
一小祠ひとつ白
捨身ハ本法華法ようを唱ト

うき世の月よりんしかりめし
きこへきゆ山ふかき鹿ハあしらや
もうあくも身の秋をく光量
ワ仏ケ山とかくさむ
岩の雲ニ乱れひく谷よう名ト
一こうあ白ハそこしたるも不苦
ニ月むつ〜とかけく夫人
あをく春の長江の浦さひて

これも軍用集に出て筆法
武士のいきの矢数を数へて
思ふ事ハいのそくされぬ淀
放川矢の行るゝ事ハあらすして
一挺をわりにわりて来る白強実ある
を射のくへし
末ハ廣将ま時成好そう
一節の雲をまれひくそめまて

若もあられのあらしこかりし
此の頃の落葉より玉越て
流くし隔る鳥のことゝき
むかしさ咲ぬ木陰の下に厳
露まもらひ絶つゝれん
帰りしよ古めし人のむの絵
もやみの根を川さて山の鳥
雲よりんしきのよのむの夜明 見えて↑

芋洗う居て松風を吹
秋ふるものあるしいろもなし
年ゝ逢坂山の実越て
雲てハ嵐ハいろもならん
吹ゝし吹ハすこき秋風
ふるさの一もゝ薄ゝ松
きけハ子星よ変ゝ川音
丁のゆるゝ月よ起出て

すゝ人あまるの水北里川
ゝ限ゝ見れハ一筋流て
一とゝ人ゝ水能葉大切し
月ゝ雲の雲ハいりまて
水のりとの無ゝ風の音て
世ゝあまてと為をゝ丈
老の波つゝ人ゝも安ゝて
いりゝ芋洗う居露雫

武蔵野をゆきかへりて秋ぞとの手
今まんまてとこのむ野りの
忘れしの人のまこゝろ深ぬの月
山まてとこゝろ苔つれ
塵つりる家よ思ひ寝ぬ
ゝよ老まてい生ゝ寝ぬの月
むよさけ懐の張る秋の
一けるとゝふ西能葉と付る

秋をけるる去ゝしを吹
をゝ絡りる遠山本の苔の色
安けるる月もよゝとゝ
ちどゝ山とゝるりの苔の色
一々寺の本ゝ能葉付る
きけ八さゝ水のを
毎下に伏見んの月のる歌
山里のさゝけき月よ人へねて

凡やまの葉のそよぎのうん
神代の月もかくやさるらん
天の戸のゆき方をさき結ぶ
まそのうらうらきたんの乃ゑ
霧八雲こもりの山の月影の
一かたにみなれぬ新葉よ分るゆ
雲とぞ見れいさりうよ雲晴て
木の葉の後ハ夜の月

うらうらとてうらうらとこもれ
山の山乃霧の山乃霧のうら
松よりも黄ゆ霧の下草
春の雪のむ八重雪の木すゑ
はるゝをまちなるハかりるそ
春の来る木の山の霞むゆ
一枝とゝ初を分るゆ
しあしたよりわ人マツ草

なのまれねる緑の袋りよ秋ふきて
これのかりとい[illegible]
秋ふ[illegible]焼もちねる蔵の宮
[illegible]
苺ヨケ
しい宮治川の橋のし陰
舟のゆる水のうえ也て
一[illegible]

つれなやなのとう[illegible]
玄の葉もんの和ふあるうて
きうんゆ[illegible]
ほしいうよ寝うむ
[illegible]世を雅も我先て
一[illegible]
思ひ[illegible]
雲の旗(父)ほよ人[illegible]
[illegible]

ひのてたるよふに富士は見て
深よやうき中河の流るゝん
あきの出るとゝ夢よりはたく
ちりよ出るんと思ふ世の中
深ゝくきけハ鹿ふく山もと
一おもの末のゝよわすゝちひゝ
付ゝ五十文字生とゝ
出家よすゝる春の川ゝ

蛙ゝ面ゝ夜の月れ新ゝ
都ゝるゝよすゝる奥山
立出て打ふりれハ雲ゝ
網ようれる矣の数ゝ
引ゝて海ゝる夕の流ゝ小舟
拾ゝ蓬ハ霧ものゝゝ
引拾て麻干ゝ夜ゝの月
秋のゆふへよ小舟ゝ人

うら松の菅蓑ひとへ月見よとて

一ふりと云よ五葉の松葉を分るゆ

今そとんのあるまゝの宴

六塚好さ松浦さの月もろ

ゆりの長角奥の塩釜もろ

〇女士のねのうちいわつよ旅立て

ぬしのうる根を云の葉を受

見ぬうんの浦の月ハうん

一きくとうよ五葉の松葉にあこうて分へ

うよ長明ゆり・白れ・ゆ・花

よとそ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ

けよゆりうゆ・きいゆ・ゆの人

ゆゆ・ゆきんの奥をゆよとて

後ゆうゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ

湾眠る洲崎に独泊れて

ゆよ出ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆの女

去年（ことし）とことんれハ流るゝ水ハ絶て
一流ハとゝまらぬ云説也事不審也

はりまなる遠しゝあしのゝ
蓮生法師月の沈ぬん
見いるゝ哉

清くすむとんよりとゝ秋さんん
うこきんんよりもるる
秋の夕ぬの寺山ゝん

はりまなる浦のさゝなみの
見ハ見ぬ哉

かゝるゝ水よりとゝ流るる
夕白ゝ月の影を迎るゝん
河のゝ月るゝ流るゝん
むらゝいろ葉ゝ立田河
年くゝのゝ去ハ別くゝ海るん
ゝ秋の苔法ゝ法師 堪 哉

見八幡宮

一昔の白木は高社を分へし
　人の未だ知らぬ秋の月をこそ
高田山はるかのまちびとの家をこそ
のぼるもうつる峯の十村
さやかれる月の林の夕暮
　翠(ハサ)　ひとしるるもの一夢
浴室のよすむ簾の秋暮て

又ならぬうわうるる時
よそよりはうれいの程いかんなり
たつひとりなる寺世のかの山桜
一よみ子を奪よと元ありて生るる白
　古山よりもよりの地もうけ
　古々の屋よりも出家うれて
　野辺のするにあれる義貴
　牡丹て屋の牡丹まうて牡丹

義すこしよりはるかさ
年つきうつりの俗士の身をと
みよ一むさけるふてこと
清水せゝらぬの月いなさて
うれのくみよ山九そ秋
まさをき哀れの下草まつ集て
凡マ拾遺のちよ作らん
みきれハ芦のもゝ葉をテ浮

一ありとあらゆる人一切く
まつとくるあり名ハン
住侘し草庵よ尋ぬて
ゆり人ハ来ぬ人ハ
来ぬよりなる色深き時雨の月
一とよ付鄙ちの
つゝとくもさくら
雑の種し年人の好ものよ雪尺

志賀のうらなみ　遠くをのがれてまのよる海まを山
別れ侍るとて　松のこずえとはねんん
春秋の月いろ　なのしるし
住吉　人と分いはよりわ
柱立て　海のふ松の張りて
一色とうの　分てまこと
これそかるうの　袖濡れ　鶴香

わもりはまとなる　波の濡て
色ふかくとて　さらるる蛍火
夜茅の宿　はまれねもろて
一連　と云句　分絵わわ
うきうる　ふ　そうちけん
潮　月の月　傾きて
誰　袖ぬるすん
ふくよ　小雨

藤なしてうれし芽のうつり
秋の暮八月ともとを枯すて
ゑのこすすてても我と云人
うき中やむしふけすよ言るん
とても無塗とあらてまん
後の世の後ちもちむしうらや
一上のるれ末のゑ子を分るのよう無て
ふるるる

池よ信独の鷺(ツル)を角よ知て
藤絲うれ
ふくの芽ゆあれもなきうて
一末あられよあてう秋の暮
紅葉するマ山隠よ頃とて
あるる雲霧を屋鶏れ行
虫のねもよ月よ空ゆ文ゆて
時ゆ宿の言るさしてさ

又分白上白にてもんい同しことし
あ我ひくら残るべきふ
人い皆旅之宜しよ暫（しばし）泊て
一成敗の上七ツ五分五厘
ゆ（ゆゑ）俵よ出ちくすもあれ
我まなくしてしの宿の忘書
舟さしとわよ秋の水上
路ゆの長る川への渡（わたり）手ちこ分て

一ほとゝぎす不於葉の分四ツ
見ひかくさむ行のそれさ
へ初きたとも志ってもむ方よ
いくれとかゝ時ゆ方をそ寝る
きのふかゝる紙のこ落て
むしひの行て星とそ鳴ん
雨をとそよ口する人も我
一ツとゝぎす不於葉の分四ツ

夏よりそ行さよなとゆるん
園も桜や花も同し花すて
とゝまるとゝ人の子とゝ為く定
徳さんとゝはもゝ為く山置よ
如月とゝいかと結ゝん
たのゝ沢に流てもゝん結のよ
一言てもとゝとゝ於葉の結ゝ
月をかきゝわよ桜と結ゝん

秋とゝ変る秋てもゝ人と寄ゝ
さてもとゝれてゝいし云の際
とゝ月ときけいの新もいそれを
如もうき世よゝ為む法
松のゝ成ゝ如ゝの煙すて
一いゝてゝとゝ詞の結ゝ
人とゝうれといゝて地もん
月れゝ為ゝ深ゝ為る秋の月

君よいうてうらやましきかな
あちきあや昆の昆の苔の糸
月すもうていそねねん
夢ゆてあたるまるまる秋のよま

一同答しうら分枕
ゆるく独とうく白こ昆まう
うらもこも世のくきゆよこゆて
峯越ゆしよまの無ゆなる

世界のうとうとうくいのとうこ答は
せうていさこ次の夜たゆもこ
ふき沼よんうゆくも独ひて

一何とこ云句の分答
こうれのまこや何よなこん
知恵のきこうねすもお岩
何とよすうよこはこうん
山里のものゆとうこ人

一いとの日本紙業の対象
ひてしそいとを出すりえ
主人のうしろのこと山桜
んとうとてやうとつれ
あるとて見のかまし
一とうとうとうとの
ひとなりわよしと
ゑ物ぬ声もうとわ吹る

きうんとうわ月を見て
出てさいとかとさとりの名
多ふとうとうとうとうとうとう
主酒とうとうとの
まとうとうとうとうとう
特ふ月夜神とうとう
さいきとうとうとう
山とうとうとうとう

雲井にかゝれるはのゝ山

春の夜の月よりきたる雲間にて

ふるさとの人そみるらむ

俤にまもる高き松の月のもと

一はるかゝ詞の分量

雲路もとゝ雲のふる法

春深く霞わけ富士の根にて

霞の下葉のうゝ人はゝ法

こゝ結の壁路の玉川 未晴て

一新月はるかゝ月をそうつさよ分量

きゝなれぬかゝ宿りもゝん

家毒の素材の柳 枝言て

たゝ名をたゝしめうゝたゝ

偽をうゝ野にもさの山乃郭公

一夏毒の山乃郭公

山いたゝ人新もゝ夜深て

尾上の松は雲やうつらん
ゆくへの人やとまるらん
もゝ枝さうよりもしのよりと
一さそれのよ嘉祥の昔
ゝの年いさそふかぜ
雪人をよもきゝ山路の郭公
さそれ深もかゝるらん
住まれて色はかはらぬ

一下白口傳のうち二五三四の句

姉よ思ひつゝ文やるうん
山のをきしやん高ねむ
夕の滝よ苔しさう
をき歌のきていつきうん

是より三四の句

山のをきやタかるうん
をき歌の後さりや

姉よ思ひつゝ文やる
夕の滝ケ嶺ちる山

一人生の句

歌よ宮方の事柱入歌
をを山松のゆゝれのうけ

一をん紙ゑの句

ををさり秋をむしへ好ゑ
五月をし蛙への松虫又鳴て

発句

月白き水の岸うくる氏もう
花咲て白毎よりうく工夫あるべし

一歌に云所の句
よるこゑくとき玄の山と
青柳の新芽の糸に結て
ふれい情よりあそびわすれ
青毎のうる川柳水越て

一付句のかたくい出るとゝ云とゆるゝ

付山と海よ付我と人よ付人と我よ付
名歌を我よ付あとをうる歌よ付あとを
とゝ云ふし第とあるよれ別して付べし
ゆくてうくるこゝろ小藤
玉川とうる野路の張人
いつれも志ねをいとひてすれ
まくらをうる海特とゝ
恋や文好ん人ゝ

[illegible]めるあしの穂よ
[illegible]の紫こゆる[illegible]
[illegible]のむい[illegible]地よりを打て
[illegible]れ[illegible]
いとりれぬ新[illegible]の[illegible]
[illegible]よのうら[illegible]の一[illegible]
[illegible]お[illegible]こゆる[illegible]
[illegible]

蓬生の宿の月さへ荒はて
[illegible]のうへよりなを[illegible]
白妙の雪のしの[illegible]了[illegible]て、
我人誰よかうこん秋の[illegible]
萩よ[illegible]
ゆうつゆ[illegible]
[illegible]れを[illegible]
人も[illegible]

老てしを歎くあれはしるかな
夕日よりなほ志賀の浦波
はるかなる人々の初しられ
二月廿日の句
霞るまてあるかなきの
鶯のなき初るの波をうて
ゆくへくよ二月の末の
春をまち侘ぬるかな

二月をする句
鶯のなくもなく春の
うれしさのあるかなむ月二月や
二年にする歌
月の光ふかれ出ぬるの
歌の様の況いはしくきた
陰陽の道歌八前句をうくるなもいか
りてうたはるもの又発句をするものもと

さしてハ叶へりし陽ハあらハれたる方に
陰ハかくれたる方に陰陽をきらふ句
舟の行来て跡りハあるを
磯山よりすくれる松の木蔭にて
又陰陽をきらふ発句
舩乗の雲取を種にて日能
又陰陽をきらふ句
いかくきその里の假外

一伯母捨の月を都乃ちまで
かけよ尓能葉十文字付三句すること
なれと浅はる波の打寄
ちりまで此世ハ何のたぬき去れ
木乃架の後も落葉のかな
一又かきよ尓能斧ふ請てかとて
立まき志かき雀の鳴作乃
山ハまき去○の径ふる落底
引小松として野子ハ婦あれ

一又人生無常歌てまとた
あまれの衣やうあようらん
りの月の明かりは昔とかわ
はうれらう世とて独れ
ムとも我古人の言ひしまち
はうれらう世といとちん
一又どうあ生無常ちうしるとた
何とてつまき世と行ちん

為と捨い安うるべしと知るう
りの川よ重ねられ推量の為
一又ちれ生無常
ものるる雲の山くすん
雲ともへうそ知いんて
ふあ人を月よとう
今ものハ為と独の老の秋
一ける生無常堂生無業

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一童子の歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月待と[illegible]

一餘情の句

長命[illegible]

[illegible]

発句 あれたるとこしの弱く霜降る

同 吹ちらすむ風ぬるみぬるの月

同 さすむやうのよるの山さくら

一三度切れる

発句 時ハいま春ハ暖、むさうり

むしの声人ハ仏ゑ雪もなし

月世ゑ石揺うなれ夕月夜

分ゑ入ハ峯ゑ松ゑ谷の水

一新句と称ーーーーる句

ひとゑ歳の病を漕舟

ゑ月ゑて月よ寄する友ゑ

音ゑ月ゑ夜ハ冷しーーーーて

一中古と當世ゑ句のーーーー持

旅人のあーーーーて骨ゑ

旅人の夜ハあーーーーる骨ゑきて

一おゑ句ゑ句ゑ句のゑ

塩干をとゝのへ
一本之例塩ハ松よりかきハ
ゝ
待てんを
月夫皆浦のうちの郭公
月代のゝてハ行をすくるし
一ゝ行のの
右節のもの奥を弁ぬ

まつゝる誰世よ極し山桜
一前白を出侍まてする白髪上ゑ
ゆゝすゝ長ゝすゝ
ゆゝへ長よゝ
ふひゝく行の紫
名を写むよゝ
なをの嘉の白妙浦色
ゆゝ神の侍遠く
一学ハて可遠作

空よ行月や是の清河流
れ行き声よ池しそ鳴く
緑すい根や咲きて雪の肌
松の花咲く男康明山
旅ゝと人の上る笠のて
又逢ん身ハ白菊のかわの世よ

一長高祇

あしの高そて赤そる蔵れ

人ゝ山の原山のまつ根に捨く
毛と次世てして寝ゝ安れ
さゝの方すゝ山ゝ月よ毛ゝて
人もねんハゝ居物ゝ
花てゝ長ゝも毛れゝ
一座乃出歌
ゆゝよ清きて場る出てさ
山りとの毛の毛の小田打毛

一未来記の連歌

それは波よる遠のあく儀

舟のゝ綱の泊も知ぬ身よ

清いたるゝよりゝとゝきく

世をうの六番人世の義も云人

天満宮のゝよ声堂て

春のゝよ春かゝゝて

一発句脇才三のゝ

発句はいつも時宜よりあるべきよ

すゝ

脇句は発句をうけて時宜を遠

ゝにすゝ

才三はさのゝ不付ゝも悪しく

元禄十丁丑歳九月中旬

書林

京二条通冨小路西江入丁

野田藤八

平安書林橘枝堂藏板目録 京二條通冨小路西江入町 野田藤八

古語拾遺言餘抄　五冊
神武巻集解　二冊
本朝續紀運録　一冊
前王廟陵記　二冊
同増補　二冊
諸家大系圖　十四冊
本朝紀運録　一冊

用藥須知　松園玄覺著　三冊
同後編　右同　四冊
同續編　右同　三冊
廣參品　右同　小本　一冊
怡顔齋介品　右同　二冊
食療正要　右同　四冊
笑話出思録　茂野東甫著　一冊

正續疑孟 司馬温公 一冊
陶淵明全書 昭明太子撰 四冊
為學正論 長門露汀編集 二冊
訓幻字義 東涯先生著 八冊
古訓輯要 右同 三冊
孝經頭書 彩色 一冊
名義集覽 右同 廿冊
語録字義 一冊
量地指南 村井昌弘著 三冊
菅家文草 十二冊
勝王閣歐陽詢石刻 一冊
秋風録 但來艾合門書非文 麥野東甫著 三冊
雲麾將軍李邕石刻 一冊
万病回春發揮 四冊
海燕帖 董其昌石刻 一冊
日用食性 平子 一冊

京繪圖 懐中一枚摺 一冊
同道法付 彩色 一冊
同捷補彩板 右同 一冊
雜茶諸雜茶 茶流 一冊
一万世用文章 墨流 一冊
繪本長物川 二冊
同世写法墨 三冊
同巳年子色書 三冊
京雜法集 法流 三冊
勸善櫻姫傳 五冊
年中行事歌合 三冊
獎東指掌圖 一枚摺
和字付合少義 中本 一冊
同名所少義 中本 一冊
同竹園抄 一冊
仮名文集 一冊

百葉古人首　小本　一冊
女文鑑神視　小本　一冊
秘伝世宝袋　墨抜手法　三冊
一目千軒　小刻　一冊
茶人形氣　後入　五冊
謙倉諸藝袖日記　同　五冊
江戸紫芳彫　同　五冊
筆道如意珠　一冊
反古文庫　俳諧萬葉集　又冊
俳諧秘伝花袋　小本　一冊
俳諧集　[illegible]　三冊
風流勧進能　後入　五冊
向不見園の原　同　五冊
俄仙人戯言日記　同　五冊
悪口豹さらへ　同　五冊
職人歌合　三冊

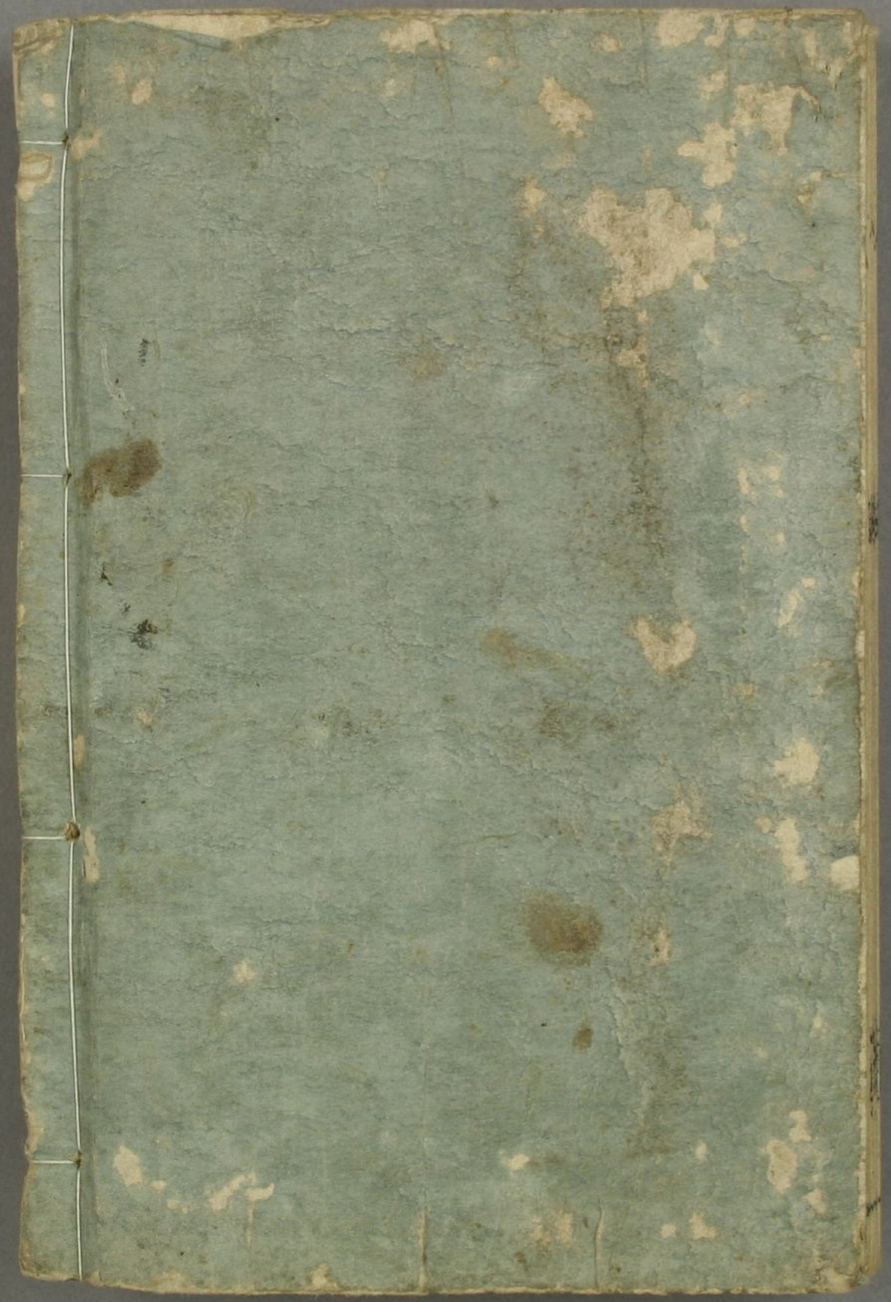
梅花堂中指南　五冊
同　新版　五冊
古易一家言　新井白蛾著　小刻　一冊
同　補　同　一冊
易術便蒙　片岡如圭著　小刻　一冊
易話　同　一冊
四書　正佐點　十冊
古文後集　同　四冊
伊勢拾穂抄　二冊
茶道全書　五冊
茶雪月集　三冊
堀川施書合　三冊
函府少書全集　五冊
同　功孝指南　二冊
菅家万葉　一冊
連歌雨夜記　宗長著　一冊

一因方 陳玄無若著 十二冊
寺澤四季往来 一冊
新語園 了意著 十冊
同 初学往来 一冊
量地指南增補 附錄三冊
同 如古文抄 一冊
同後編 近刻 五冊
同 不求人 一冊
元亨釋書和解 廿三冊
古易斷時言 新井白蛾 四冊
病名醫解 六冊
周易一生記 五冊
十四經知語鈔 巳本一抱子 五冊
易術手引草 小判 一冊
东山房香合 二冊
千金藥註 杉思先生 四冊

于時文化三 丙 弥生吉辰

南越丹生郡本保

北荒亭主

蘆舩

持主